会員の広場

放射線診断学 専門教授 就任のご挨拶

大阪医科大学　放射線診断学　専門教授　山本 和宏

令和元年6月16日付けで総合医学講座放射線医学教室　専門教授を拝命いたしました。

開設80年の歴史がございました大阪医科大学 放射線医学教室は、令和元年を以て放射線診断学教室と放射線腫瘍学教室の2教室体制で運営され、現在は放射線診断学教室に在席しております。放射線診断学教室は、CT検査、MRI検査、核医学検査を代表とする高度最先端医療機器による先進的な画像診断、さらに画像診断技術を応用した画像下治療（インターベンショナルラジオロジー：以下IVR）による診療支援、臨床研究ならびに医学教育を行っております。小職は、現職の放射線診断学教室 専門教授の他に、読影診断室室長、中央放射線部長、医療放射線安全管理責任者を担い各診療科の診療・医療安全・臨床研究を幅広く支援しております。

画像下治療領域では、泌尿器科と協働し4ルーメンダブルバルーンカテーテルを使用した膀胱温存療法における動注療法を行い、2013年（98件）、2014年（128件）、2015年（150件）、2016年（185件）、2017年（185件）の症例を施行し、さらに肝臓内科医、泌尿器科医に診療科を越えてカテーテル手技を指導。コイル治療においては、電気式デタッチャブルコイル使用本数は2013年（288個）、2014年（215個）、2015年（246個）、2016年（241個）、2017年（462個）使用し、社会のニーズ、他診療科のニーズに応え、大阪医科大学の社会的使命に貢献し、患者様のQOLを上げてまいりました。

放射線画像診断領域では、画像管理加算3（特定機能病院）の施設基準要件を満たすため、線量管理体制として医療放射線管理室の設立、日本医学放射線学会画像診断管理認定施設認定の取得、画像管理加算3に係る診療体制構築などを主導的に取り組み、令和元年5月より画像管理加算3施設基準を取得しました。

医療安全領域では、2020年4月に医療法施行規則の一部改正として施行されます「医療被ばくの適性管理」（CTなど放射線診療に関し、患者の被ばく線量の記録と患者への説明を医療機関に義務化）に向け医療放射線安全管理責任者の立場で、指針の立案、教育制度、放射線被ばく管理システムの稼働に取り組んでおります。

臨床研究領域では、麻酔科との画像処理ワークステーションSYNAPSE VINCENTを使用した臨床研究、婦人科・腫瘍科とのMRI拡散強調像、PET-CTを使用した臨床研究、泌尿器科とのMRI Zoomed Diffusionを使用した臨床研究をすすめています。IVRにおいては特に大阪医科大式膀胱

温存療法(OMC-regimen)における膀胱温存療法においては、患者のニーズと術者とデバイスの技術的な融合により実現させた治療で私が独自に開発した4ルーメンダブルバルーンカテーテルを動注化学療法に使用しており、膀胱癌患者に対する効果予測の一環として動注化学療法時の骨盤内血行動態の新しい評価(ソフトウェアsyngo iFlow)、また、施行困難な症例にて4ルーメンバルーンカテーテルを使用した動注化学治療をよりスムーズに行う為、術者の熟練度に左右されないデバイスを開発し、より効率的かつより安全な治療法の開発をすすめています

今後の臨床研究テーマとして、大阪医科大学を放射線診断におけるArtificial Intelligence(；以下AI)読影支援基幹センターとし情報資産を、北摂地区の医療機関に対しAI読影支援として提供可能な環境を整備することで、画像診断の地域医療の貢献として北摂地区画像診断支援構想を目指すことを検討しています。

以上、多くの患者さんが画像診断・IVRの恩恵を受けることが出来るように尽力することが自らの最大の努めと考え、患者さんのために、大阪医科大学の医療の発展のために、全力を投じたいと考えています。今後も、何かご協力出きることがありましたらお気軽にお声をかけていただきますと共ともに、医師会の先生方にはますますのご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成　元年　大阪医科大学卒業
平成　3年　大阪医科大学 放射線医学教室 専攻医
平成　8年　大阪医科大学 放射線医学教室 助手
平成 12年　博士(医学)学位授与
平成 13年　大阪医科大学 放射線医学教室 講師
平成 23年　大阪医科大学 放射線医学教室 准教授
令和　元年　大阪医科大学 放射線診断学教室 専門教授